平安時代の女性はどうして漢詩を詠まなくなったのか

張　龍妹

去る四月に「日韓宮廷女性日記文学叢書」三冊の中国語訳を上梓した。平安の巻『紫式部日記』には「蜻蛉日記」「和泉式部日記」「紫式部日記」「更級日記」「讃岐典侍日記」の五作、中世の巻『十六夜日記』には「うたたね」「十六夜日記」「とはずがたり」「竹向きが記」の四作、韓国朝鮮王朝の巻『恨中録』には「癸丑日記」「仁顕王后伝」「恨中録」の三作を収録した。このように日本と韓国の女性が「女手」を使って書いた作品を一緒に翻訳出版しようとしたのは、これらの作品に古代日韓の女性文学の違いが端的に顕れていると思い、また中国にそのような作品はないが、あるとしても朝鮮王朝のような作品しかなかっただろうから、中日韓三国の相違を読みとることができると思ったからである。そのような計画を立てたのはもう一昔前のことになるが、なかなか実現できなかったのは、古典韓国語の翻訳者を見つけることができなかったためである。古典韓国語で書かれた作品はほとんど上掲の三作に尽きるのだが、その研究者がいなかった。それに、業績至上の現在、中国では、このような翻訳をしても研究業績として数えられないため、「無益」な仕事を誰も引き受けてはくれなかった。今回、「癸丑日記」と「恨中録」を翻訳した張彩虹氏は朝鮮文学の出身者で、のちに日本文学に「転向」した方であり、こちらの意向をよく理解してくださった。さらにかつての同級生である王艶麗氏を紹介していただき、「仁顕王后伝」の翻訳を頼むことができた。私自身は「和泉式部日記」と「紫式

部日記」の翻訳を担当し、その他の日本関係の作品はすべて卒業生が担当してくれた。出版してくれたのも卒業生が勤めている重慶出版社である。自分一人の執念のために、多くの方を巻き込んでしまった。感謝の気持ちとともに、「無益」な仕事をさせてしまったことにより、もしかすると皆さんが大学の研究ノルマをうまくこなせなかったのではないかと心配してもいる。また、水際対策のため、日文研に着任する直前、マンスリーマンションで二週間「待機」したことと、着任直後に日文研ハウスに閉じこもってこれらの校正をしていたことも忘れられない思い出となっている。

さて、日本でこのように多数の仮名日記文学が生まれたのは、女性が漢詩文から遠ざかっていたことが原因の一つと思われる。「紫式部日記」には、かの有名な漢才自慢の段落がある。

この式部の丞といふ人の、童にて書読みはべりしとき、聞きならひつつ、かの人はおそう読みとり、忘るるところをも、あやしきまでぞさとくはべりしかば、書に心入れたる親は、「口惜しう、男子にてもたらぬこそ幸なかりけれ」とぞ、つねになげかれはべりし。

『紫式部日記』（新潮日本古典集成）

父親藤原為時の「口惜しう、男子にてもたらぬこそ幸なかりけれ」という表現の背後には、女性は漢詩文を嗜むものではないという含みがある。しかし、一方で、紫式部の漢才が買われ、宮の、御前に文集のところどころ読ませたまひなどして、さるさまのこと知ろしめさまほ

しげにおぼいたりしかば、いとしのびて、人のさぶらはぬもののひまひまに、をととしの夏ごろより、楽府といふ書二巻をぞ、しどけなながら、教へたてきこえさせてはべる、隠しはべり。宮もしのびさせたまひしかど、殿もうちもけしきを知らせたまひて、御書どもをめでたう書かせたまひてぞ、殿はたてまつらせたまふ。

『紫式部日記』（新潮日本古典集成）

などと、同僚の女房たちに内緒で、中宮彰子に『白氏文集』の新楽府二巻を進講していた。新楽府は諷諭詩で、もっとも政治性の強い作品群であり、平安朝文人の好みからは逸脱したものである。このような作品を中宮に進講できる式部の漢才は並大抵のものではなかったろう。

しかし、すでに女性の漢才が喜ばれない時代になっていたため、日頃の式部は以下に述べているように、「一」という文字も読めない振りをし、屏風の上に書かれた誰もがわかるようなものでも読めない顔をしていたという。

「男だに才がりぬる人はいかにぞや。はなやかならずのみはべるめるよ」と、やうやう人のいふを聞きとめてのち、一といふ文字をだに書きわたしはべらず、いとてづつにあさましくはべり。読みし書などいひけむもの、目にもとどめずなりてはべりしに、……御屏風の上に書きたることをだに読まぬ顔しはべりしを、

『紫式部日記』（新潮日本古典集成）

このように引っ込み思案なのは、式部が内向的な性格の持ち主であるからだとも思われる。

だが、

清少納言こそ、したり顔にいみじうはべりける人。さばかりさかしだち、まな書きちらしはべるほどもよく見れば、まだいとたらぬこと多かり。かく人にことならむと思ひこのめる人はかならず見劣りし、行末うたてのみはべれば、……

『紫式部日記』（新潮日本古典集成）

「まな書きちらしはべる」などと式部に酷評される清少納言にしても、実は漢詩句をそのまま書くことは極力避けていたようである。『枕草子』には、少納言が自身の漢詩文知識を自慢する章段が少なくないが、かの有名な香炉峰の章段でも直接漢詩を引用しているわけではない。他にも、

見れば、青き薄様に、いと清げに書きたまへり。心ときめきしつるさまにもあらざりけり。「蘭省花時錦帳下」と書きて、「末はいかに、末はいかに」とあるを、「いかにかはすべからむ。御前おはしまさば、御覧ぜさすべきを、これが末を知り顔に、たどたどしき真名書きたらむもいと見苦し」と思ひまはすほどもなく、責めまどはせば、ただその奥に、炭櫃に、消え炭のあるして、「草の庵を誰かたづねむ」と書きつけて取らせつれど、また返事も言はず。

『枕草子』七十八段「頭中将のすずろなるそら言を聞きて」

（新編日本古典文学全集18）

藤原斉信から白居易の詩の一句「蘭省花時錦帳下」が寄せられ、「末はいかに、末はいかに」と責められたにもかかわらず、「これが末を知り顔に、たどたどしき真名書きたらむもいと見苦し」と思い、漢詩をわざわざ和歌の下句の形に整え、「草の庵を誰かたづねむ」と返している。

また「二月つごもりごろに、風いたう吹きて」の段は、一条朝きっての文人藤原公任との応酬を記述したものである。公任から下句として「すこし春ある心地こそすれ」が寄せられ、「空寒み花にまがへて散る雪に」と上句を詠んで返す。これも「三時雲冷多飛雪、二月山寒少有春」という白居易の詩を模したものであるが、のちに公任と並ぶ時の俊才源俊賢から「なほ内侍に奏してなさむ」と褒められたそうである。

この「内侍」というのは清少納言がかねてから憧れていた職で、彼女が仕える皇后定子の母高階貴子は、円融天皇時代の内侍であった。この高内侍はまた、平安宮廷において最後に漢詩を詠んだ女性であると思われる。

この高内侍について、『栄花物語』では次のように語られている。

この中納言殿（藤原道隆）、才深う、人にわづらはしとおぼえたる人の（高階成忠）、国々治めたりけるが、男子女子どもあまたありける、女の……、先帝（円融）の御時に、おほやけ宮仕に出し立てたりければ、女なれど、真字などいとよく書きければ、内侍になさせたまひて、高内侍とぞいひける、……母北の方の才などの、人より異なりければにや、この殿の男君達も女君達もみな御年のほどよりはいとこよなうぞおはしける。

『栄花物語』巻三「さまざまのよろこび」（新編日本古典文学全集31）

弟の藤原道長は本来入内予定で、一世源氏である源雅信の娘と結婚しているのに対し、兄の道隆は地方官の高階成忠の娘、しかも女官である貴子と結婚している。それ自体がマイナスに評価されがちであるが、定子兄妹が優れていることを「母北の方の才などの、人より異なりければにや」と関連づけ、評価している。

しかし、『大鏡』になると、藤原伊周を語る際にその母に言及し、

母上は高内侍ぞかし。されど、殿上えせられざりしかば、行幸・節会などには、南殿にぞまゐられし。それはまことしき文者にて、御前の作文には、文奉られしはとよ。少々の男にはまさりてこそ聞こえはべりしか。……「女のあまり才かしこきは、もの悪しき」と人申すなるに、この内侍、後にはいといみじう堕落せられにしも、その故とこそはおぼえはべりしか。

『大鏡』「地」道隆（新編日本古典文学全集34）

高内侍が行幸・節会などの際には南殿に召され、少々の男性なら顔負けするような漢詩を献上していたことを述べながら、「女のあまり才かしこきは、もの悪しき」と否定する。しかも「人申すなるに」の、不特定の「人」という語り方は、それがある程度世間的な常識であることを匂わせる。そして、その後の道隆早世による中関白家の没落を、貴子の漢才に起因させている。

『紫式部日記』に「男だに才がりぬる人はいかにぞや。はなやかならずのみはべるめるよ」とあるように、摂関時代には大学寮出身者による立身出世の道もすでに阻まれていた。そのよう

な中で女性の漢才は忌避されるようになり、中関白家の早すぎた没落もそれを後押ししたであろう。『文華秀麗集』『経国集』には、有智子内親王の作品の他に、姫大伴氏、惟氏といった、おそらく女官であった女性が君臣唱和の場で詠んだ漢詩が収録されている。高内侍も同じように活躍した最後の女性かと思われるが、彼女がどのような漢詩を作っていたのかは記録されていないようである。日本の女性が再び漢詩を詠むようになるのは、江戸時代まで待たなければならない。

日本における国風文化の成立についてはさまざまに研究されている。そのうえで、女性がなぜ漢詩を詠まなくなり、仮名文学の創作に向かうようになったのかという点もまた、その成立事情を解明する一つの糸口になるのではないかと思われる。今回の翻訳出版が、漢文化との距離がいかに女性文学に影響を与えていたか、その理解につながることを願っている。

（北京外国語大学教授／国際日本文化研究センター外国人研究員）